

# 〈顔〉を表す視覚的体験名詞をめぐって

—— 対応する英語表現との対比の観点から ——

尾 野 治 彦

## 目 次

- 1 はじめに —— 「場面内視点」と「場面外視点」 ——
- 2 大津 (1993) の〈見える範囲〉と池上 (2002) の〈見え〉
- 3 「実質名詞」と「体験名詞」
- 4.1 「顔」
  - 4.1.1 「顔」の「実質名詞」としての用法
  - 4.1.2 「顔」の「体験名詞」としての用法
- 4.2 「表情」
  - 4.2.1 「表情」と expression が対応する場合
  - 4.2.2 「表情」に対応する英語表現がない場合
- 4.3 〈顔〉を表すその他の表現
  - 4.3.1 「面」
  - 4.3.2 「色」
- 4.4 まとめ
- 5 「姿」
- 6 「顔」「表情」「姿」以外の「体験名詞」
- 7 〈見え〉の体験の表れとしての日本語と日本文化の関連性

## 1 はじめに —「場面内視点」と「場面外視点」—

日英語の場面や状況の把握の仕方に対しては、池上 (2004, 2005) の「主観的把握」と「客観的把握」や中村 (2004) の「I モード」と「D モード」の名称がよく用いられるが、濱田 (2011a) では、「場面内視点」と「場面外視点」という用語が新たに提唱されている<sup>1)</sup>。池上と中村の名称は、日英語のそれぞれの把握の特徴を捉えたものではあるが、どこから事象を見ているのかという観点からすれば、濱田の「場面内視点」と「場面外視点」は、その特徴を的確に捉えた名称であると言えよう。また、「場面内視点」では、対象との「身体的インタラクション」(中村 2009) による把握であることから、「参照点型認知」となるが、これは、尾野 (2011) での「体験的把握」に相当する。また、「場面外視点」では、事象のすべてを見通すことができることから、「tr/lm 型認知」となるが、これは尾野での「分析的把握」に相当する。よって、用語については次のような対応関係が成り立つと思われる。

(1) 「主観的把握」・「I モード」・「参照点型認知」

—「場面内視点」—「体験的把握」

「客観的把握」・「D モード」・「tr/lm 型認知」

—「場面外視点」—「分析的把握」

西村 (2000 : 152) は、日本語では、「表現主体が経験主体と一体化した視点から状況を捉えている」と述べているが、この「表現主体が経験主体と一体化」が、中村の言う「身体的インタラクション」であり、本稿での「体験性」であるとしてよいであろう。また、「体験」の意味については、国広 (1997 : 28-29) が「間接的な知識ではなく、行動を通して直接に知覚し、印象を受けることそれ自体を指す語」としているが、このことも、「体験」の意味合いを理解するのに役立つと思われる。

尾野 (2008a, 2008b, 2011) では、「体験的把握」と「分析的把握」の観点から、事象の推移を表す「S1 と、S2」構文と、時の推移を表す「やがて」について、これらの表現は英語にそのまま直訳することはできず、逆に、これらの対応表現のない英語原文が日本語に訳出されるとき、これらの表現が訳語として表れることを論じた。このように、構文であれ、語句であれ、ある日本語表現が英語に訳出されず、逆に、英語原文にはなかった表現が日本語に訳出される場合、本稿では、それらの表現は、「場面内視点」がもたらす、認知主体と記述対象との「身体的インタラクション」による「体験表現」と名付けたい<sup>2)</sup>。「場面内視点」と「場面外視点」による具体的な日英語表現の違いは、中村 (2009) において 23 項目にわたって詳述され、濱田 (2011a) においても幾つかの具体例が説得的に論じられているが、本稿は、これまで論じられることがなかったと思われる、名詞表現の「体験性」について、特に視覚表現である「顔」を中心に、英語表現との対比の観点から論じるものである。最後に、視覚的体験性の表れの観点から日本語と日本文化の関連性について触れることにする。

## 2 大津 (1993) の〈見える範囲〉と池上 (2002) の〈見え〉

まず、大津 (1993 : 79) の興味深い次の記述を引用したい。

(2) 次のような表現はごく自然な英語である。

She gazed at her baby with a happy smile.

これを「彼女は自分の赤ん坊を幸福な微笑でみつめた」と訳しては、日本語として不自然になる。「幸福そうな微笑でみつめた」として、初めて自然になる。「幸福そうな」は、外から見て、見える範囲内で判断した表現だからである。

She left the store happily.

これもごく自然な英語だが、これも「彼女は幸福に店を出ていった」と訳しては、日本語としてやはり不自然である。「幸福に」を「幸福そうに」に変えて、ようやく自然になる。見える範囲内での表現になるからである。

.....

とにかく、英語国人は目に見えないものが見えるので、赤ん坊をみつめている微笑や店を出ていく気持ちを「幸福な」とか「幸福に」と断定できるが、われわれには見えないものは見えないので、「～そうな」、「～そうに」と外から推測した表現しかできないのである。日本語は見える範囲で表現する言語なのである。

(下線部筆者)

ここで述べられている、「幸せだ」と happy に関する日英語の心理述語の相違はすでに指摘されていることがらであり、何ら目新しいことではない。しかし、このことについての大津の貢献があるとすれば、「幸福な微笑」では不自然で、「幸福そうな微笑」でなければならないのはなぜかということに関して、「日本語は見える範囲で表現する言語」であるとの大胆な一般化をしていることにある。

ではなぜ、「見える範囲で表現する言語」なのかということであるが、ここで、関わってくると思われるのが、濱田 (2011a) で論じられた「場面内視点」の考え方である。つまり、「場面内視点」においては、語り手が、現場の事象を感覚的に捉えることが可能になり、そのため、感覚の中でも最も優位にある視覚的把握による表現が目立って多くなるということではないだろうか。

とはいえ、尾野 (2008a, 2008b, 2011) で論じた「やがて」といった「時の流れ」は、視覚で捉えることはできず、大津の一般化がそのままでは成り立たないことも明らかである。本稿の観点からは、「見える範

「囲で表現する」とは、認知主体である語り手が、「場面内視点」によって、語りの現場の事象を知覚体験として捉えるということであり、「見える範囲で」とは「体験する範囲で」という、より大きな枠組みである「体験性」の観点から捉えることが求められよう。「場面内視点」においては、「見えること」は「体験すること」でもあるのである。

一方、池上は、日本語表現の特徴として、「当事者の眼を通しての〈見え〉を描く、当事者の身に起こったことをその当事者の〈体験〉として描く」(池上 2002: 84) ことを挙げている。この池上の〈見え〉は、大津の「見える範囲で」と重なり合うものであり、大津の一般化についての問題点は池上にも当てはまると思われる。ここで、〈見え〉を、〈捉え〉が可能な〈現場に存在する事象〉にまで拡大することにする。

(3) 〈見え〉とは、〈捉え〉が可能な〈現場に存在する事象〉を表す。

よって、大津と池上の一般化は、次のように修正することができ、より射程の大きなものになると思われる。

(4) 日本語は、〈見え〉を体験する範囲で表現する言語である。

以後、〈見え〉を (3) のより広い意味で用いることにする。

一方、先の大津の引用において、なぜ、英語ではストレートに a happy smile と言えるのかということになるが、英語は、「場面外視点」からの記述であり、記述される事象は、客観的な事象として捉えられ、そこに、「場面内視点」においてのみ可能な、現場の事象との「身体的インタラクション」は存在しないからであるということになる。「英語国人は目に見えないものが見える」とは、「英語国人は目に見えるものとしては表現しない」、つまり、「英語国人は体験するものとしては表現し

ない」ということである。

### 3 「実質名詞」と「体験名詞」

大津の引用にある、「幸福そうな微笑」における「そうな」については、森田 (1986:592) は「視覚的な状態判断」を表すとしているが、この表現も、尾野 (2008a, 2008b, 2011) で論じた「やがて」や「S1 と S2」と同じような、体験性の表現ということができると思われる。このような、語りの現場での認知主体の体験を表す表現は、〈顔〉を表す幾つかの名詞表現にもあるとするのが本稿の主張である。

例えば、「木」や「本」といった日本語は、tree や book と英訳され、逆もまた成り立つ。このように、tree に対する「木」のように、英語と日本語にほぼ1対1の対応関係が成り立つ場合の名詞を「実質名詞」とする<sup>3)</sup>。ちなみに、英語の名詞は、「体験性」の要素がゼロであるので、すべて「実質名詞」である。一方、日本語の「様子」「気配」「調子」といった、語り手が語りの現場での感覚的な体験を表す表現については、これらの語と、1対1で対応する英語の名詞表現はあり得ないと思われる。また、このような日本語名詞の「体験性」の度合いには幅があると考えられるが、以下、すべて、「体験名詞」という名称を用いることにする。もっとも、「実質名詞」「体験名詞」の名称は、あくまで便宜的なものに過ぎないものであることはお断りしておきたい。

さて、日本語において、「体験名詞」か「実質名詞」かは、あらかじめ単語によって決まっているのではない。例えば、「顔」について言えば、face と対応関係にあり、一見、「実質名詞」であるようにも思える。しかし、「顔」には、英語での対応表現がない「見える範囲での体験」として「体験的」に用いられている用法もある。また、「表情」や「姿」のように、expression、figure と対応英語表現があっても、日本語では、ほぼ「体験的」な意味でしか用いられていない場合もある。

本稿で用いる例文の資料として用いたのは、主に、3冊の日本語原文の小説とその英語訳、3冊の英語原文の小説とその日本語訳であるが、3冊の日本語原文の小説と3冊の日本語訳の計6冊の小説に現われた「体験名詞」数は、次の通りである<sup>4)</sup>。

(5) 6作品における「体験名詞」の数

	顔	表情	姿	気持ち	口調	気分	様子	調子	気配	雰囲気
凍える牙	233	92	54	37	17	55	32	4	13	28
侍	231	44	26	39	2		5	16	19	1
戸隠伝説	147	17	23	19	18	11	33	5	12	6
ホテル	230	40	42	48	16	34	37	33	4	6
マネー	187	54	20	37	75	28	2	8	5	4
ダヴィンチ	189	27	39	16	24	17	24	5	6	5
総計 2501	1217 49%	274 11%	204 8%	196 8%	152 6%	145 6%	133 5%	71 3%	59 2%	50 2%

この表からは、視覚による表現である「顔」の数が群を抜いていることがわかるが、これは、「場面内視点」においては、人が事象において最も目立つものであり、かつ人の身体部位の中でも〈顔〉が最も salient であることを考慮すれば当然のことと言える。

さて、「顔」と「表情」が、この6冊の中で、それぞれ、日本語と英語の対応関係がある場合と、日本語だけにおいて用いられ、英語にはその対応表現が見出されない場合の比率がどの程度の割合であるのかということが本稿での問いと関わってくる場所であるが、6冊についての結果は、以下の通りである。なお、日本語原文の小説については、「顔」「表情」に対して、対応英語表現に、face、expression、look の名詞が用いられている場合が「(対応) 有」、そうでない場合を「(対応) ゼロ」

とする。英語原文の日本語訳の小説については、日本語訳の「顔」「表情」に対し、英語原文で、face、expression、look の名詞が用いられている場合が「(対応) 有」、英語原文に、これらの対応表現がない場合を「(対応) ゼロ」とする。

(6) 「顔」「表情」と face、expression、look の対応関係の数

	凍える牙		侍		戸隠		ホテル		マナー		タヴィンチ	
顔	233		231		147		230		187		189	
	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ
	104	119	148	83	38	109	82	148	76	111	64	125
表情	92		44		17		40		54		27	
	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ	有	ゼロ
	34	58	30	14	12	5	18	22	22	32	15	12

この表から言えることは、日本語原文に対する英語訳では、訳者によって、「顔」にこだわる訳とそうでない訳とで差が見られるが、英語原文に対する日本語訳では、半数以上の「顔」の表現が、対応英語表現のない「体験用法」として用いられているということである。つまり、「場面内視点」においては、「顔」が、感覚的、つまり、視覚体験的に用いられている場合が多いということである。以下、具体的な用例について見ていくことにしたい。

## 4.1 「顔」

### 4.1.1 「顔」の「実質名詞」としての用法

まず、「顔」には、face と、1 対 1 で対応する用法があるが、この場合の「顔」は、英語の face のように、「実質名詞」として用いられていると言える。



まずは、日本語の「顔」が face と訳出される場合である。

- (7) 今更のように侍は父の顔を思いだした。 (『侍』：49)

Once again the samurai saw his father's face before him,  
(*The Samurai* : 39)

- (8) 竹村は境内にある御手洗の水で手と顔を洗い、……  
(『戸隠伝説殺人事件』：307)

he washed his hands and face with holy water from the trough  
at the bottom, ... (*The Togakushi Legend Murders* : 242)

次は、英語原文の face が「顔」と訳出されている場合である。

- (9) He had an angular face, and hair graying at the temples.  
(*Hotel* : 19)

骨ばった顔で、こめかみのあたりに白髪が目立った。  
(『ホテル (上) 』：32)

- (10) The girl's eyes blazed, her face came alive in anger.  
(*The Money Changers* : 39)

女の目がきらきら光り、顔が怒りで燃えた。  
(『マネーチェンジャーズ (上) 』：59)

少なくとも、これらの例においては、日本語原文の「顔」が英語では face と訳出され、また、英語原文の face が「顔」と訳出されていることは自然であり、それ以外の表現では訳出不可能とさえ言える。よって、これらにおいて、「顔」は、ほぼ「実質的」な意味で用いられていると言ってよいであろう。

しかし、「顔」と face に 1 対 1 の対応関係が見出される一方で、「窓

から顔を出してはいけない」が、“Don’t stick your head out of the window.”と訳出されるように、日本語の「顔」に、head が体系的に対応しているような場合もある。

次がそのような例と考えられる。まずは、「顔」に、head が対応する場合である。

- (11) 彼はそれを見せまいとして顔をそむけた。 (『侍』：183)

he averted his head so that the others would not see.

(*The Samurai* : 124)

- (12) 巫女はゆっくり顔を上げた。 (『戸隠伝説殺人事件』：216)

Slowly, she raised her head,

(*The Togakushi Legend Murders* : 176)

次は、英語原文の head が、「顔」に対応している場合である。

- (13) Marsha raised her head, looking directly at Peter for the first time. (*Hotel* : 40)

マーシャは顔をあげて、はじめてピーターをまともに見た。

(『ホテル (上)』：64)

- (14) Gettum stuck her head around the corner.

(*The Da Vinci Code* : 421)

ゲタムが戸口へ顔を出した。

(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』：145)

この「顔」と head の対応関係については、「この場合の「顔」は「頭部」のことだから、face は使えない (『スーパーアンカー和英辞典』2000 : 270)」といったことがよく指摘されてきた。しかし、このような説明で

は、ではなぜ、日本語では、「論理的」には「首」が用いられるべきところに、「顔」の「非論理的」な表現が許されるのかという疑問が残されたままである。この問いに対しては、「首」の「論理性」よりは、「場面内視点」による、「顔」の視覚的優位性が優先されたためということができよう。とは言え、これらの「顔」の意味合いについても、ほぼ、「実質的」な意味で用いられていると思われる<sup>5)</sup>。

次のような例も、日本語では、「顔」が表れるが、対応英語表現では、体系的に face が表れない。このような例においても、日本語での「顔」の使用は、やはり、「場面内視点」での「顔」の視覚的優位性から説明されられると思われる。

- (15) 「パードレ」うつむいた松木は哀願するようにその顔をあげ、  
…… (『侍』：163)

‘Padre.’ Matsuki looked up at me almost pleadingly.  
(*The Samurai* : 112)

- (16) A senior PTS agent appeared at the top of the ladder, looking down.  
(*The Da Vinci Code* : 392-393)  
古参の捜査員が梯子の上から顔を出した。

(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』：96)

#### 4.1.2 「顔」の「体験名詞」としての用法

さて、本稿で取り上げたいのは、日本語では、「顔」が「ような」や「そうな」等の語句によって修飾され、視覚体験的に用いられている場合に、英語では face が用いられず、また、逆に、英語原文では、face が用いられていない場合に、日本語訳では「顔」が用いられている以下のような用例である。

まずは、日本語原文で「顔」が用いられているが、英語訳では用いら

れていない例である。

- (17) 滝沢の説明に、学生は「なるほどねえ」と本気で感心したような顔をした。 (『凍える牙』：71)

The student absorbed this absurd explanation with great seriousness. (The Hunter : 40)

- (18) 音道は、意外そうな顔で目をしばたたくと、くすりと笑いながら、「まさか」と答えた。 (『凍える牙』：267)

She blinked in surprise, then giggled, almost childishly, “Heavens, no”. (The Hunter : 142)

- (19) 男は怪訝な顔で、…… (『侍』：178)

The man looked puzzled. (The Samurai : 121)

- (20) 枢機卿は、……疲れ切った顔で小部屋に入ると椅子に腰をおろした。 (『侍』：307)

Cardinal Borghese, ..., came wearily into the room and sat down in a chair. (The Samurai : 200)

- (21) 穴戸はあからさまに不機嫌な顔をつくった。 (『戸隠伝説殺人事件』：289)

There was no mistaking Shishido's displeasure. (The Togakushi Legend Murders : 230)

- (22) 「問題は運び出しの方法ですな」

石田調査室員は興味津々という顔になった。

(『戸隠伝説殺人事件』：373)

“So the only question is, how did they get the body out, right?” asked Ishida, looking thoroughly interested now.

(The Togakushi Legend Murders : 294)

- (23) ねずみの おいしゃさまは、まだ ゆめの つづきを みている

ような かおで、あなの そとへ、できました。

(『ねずみのおいしやさま』：18)

Still half asleep, Docotr Mouse went outdoors.

(*Dr Mouse's Mission*：18)

- (24) オットセイは、せっけんをのみこんだまま、しらんかおをして、  
じっと、うえをみていた。 (『おふろだいすき』)

He was looking upward, paying no attention to us at all.

(*I Love to Take a Bath*：15)

ここでの日本語原文においては、「顔」は、(17)の「感心したような」、(18)の「意外そうな」のような感覚的・印象的な表現によって修飾されているが、これらの表現において「顔」が用いられているのは、相手の心理状態は、〈顔〉を見ることによって分かるという、〈顔〉に対する視覚体験が関わっているためである。もちろん、これらの例において、「顔」の使用は義務的なものではなく、(17)であれば、「感心したように」、(18)であれば、「意外そうに」といった表現も、もちろん、可能ではある。しかし、「顔」を用いた表現は、「顔」の視覚的な描写のために生き生きしたものとなっているとすることができるように思われる。「顔」を用いた表現は、大江の言う「見える範囲での表現」であり、池上の言う「見え」に対する体験の表れなのである。

次は、英語原文の例で、先の例とは逆に、原文には face の語がないのに、日本語訳では、「顔」が用いられている例である。

- (25) She regarded him curiously. (*Hotel*：29)

クリスティンは、ふしぎそうな顔で彼を見つめた。

(『ホテル(上)』：47)

- cf.(26) He looked at her strangely. (*Hotel*：106)

ピーターは、ふしぎそうに彼女を見た。

(『ホテル (上)』: 158)

- (27) The room clerk nodded sagely. (Hotel : 45)

部屋係はまじめくさった顔でうなずいた。(『ホテル (上)』: 71)

- (28) Tottenhoe looked at the paper skeptically.

(The Money Changers : 96)

トートノーはメモ用紙を眺めて疑わしような顔をした。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 143)

- (29) The p.r. head appeared surprised.

(The Money Changers : 167)

広報部長は意外ような顔をした。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 243)

- (30) When the curator had finished speaking, his assailant smiled smugly. (The Da Vinchi Code : 4)

ソニエールが話し終えると、襲撃者はわが意を得た顔で笑みを浮かべた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (上)』: 9)

- (31) Sophie was nodding with incredulity.

(The Da Vinchi Code : 469)

ソフィーは信じられないという顔でうなずいた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』: 229)

- (32) He was the largest leaf on the limb...

(The Fall of Freddie the Leaf)

だれよりも大きくて 昔からいるような顔をしています。

(『葉っぱのフレディ』)

- (33) Around five o'clock the sun came out.

(The Quarreling Book)

ゆうがたの 5じごろです。おひさまが ぱあーと かおをだし

ました。

(『なかなおり』)

ここにおいても、先の (17) (18) (23) で「顔」のない表現が可能なように、(25) であれば、「不思議そうに」、(27) であれば、「まじめそうに」のように、「顔」を用いない表現も十分可能である。(現に、(26) では、「不思議そうに」と訳出されている。) とは言え、これらの例からも、「場面外視点」の英語においては、trajector、landmark による把握がなされ、主語としての人についての心理状態が客観的に述べられる傾向があるのに対し、「場面内視点」の日本語においては、「顔」を用いて、主人公の心理状態が視覚体験的に述べられる傾向があると言えるように思われる。

ただ、ここで注意が必要である。まず、次の例は、「顔」の対応表現に face が用いられている例である。

- (34) 視界の隅に、婦長が驚いた顔で立ち尽くしているのが、ちらりと見えた。  
(『凍える牙』：355)

From the corner of her eye, she could see the head nurse standing bolted to the floor, surprise still on her face.

(*The Hunter* : 185-186)

ここでは、「驚いた顔」に対応する表現は、face が用いられてはいるものの、“surprise still on her face” というように、“surprise” と “face” は分離された表現となっている。しかし、現実の知覚においては、“surprise” と “face” を分離して知覚することはあり得ない。つまり、「驚いた顔」の「顔」は、体験的な意味を保持しているのに対し、“surprise still on her face” の “face” は、あくまで、分析的記述の一部として、客観的に用いられているということである。

もっとも、英語においても、face とそれを修飾する語が分離せず、日本語表現と英語表現が、平行している次のような例も存在する。

- (35) その時と同じように彼は悲しそうな顔をして宣教師をじっと見つめていた。 (『侍』：58)

He stared at the missionary with the same plaintive face.

(*The Samurai* : 44)

- (36) , and his long, lugubrious face made him seem like an ancient kangaroo. (*The Money Changers* : 21)

その長い悲しげな顔は年老いたカンガルーを思わせた。

(『マネーチェンジャーズ (上)』：33)

とは言え、このように「顔」と face が構文的に平行している場合であっても、「顔」は「実質的」な意味の他に、「体験的」な意味合いをかなり保持していると考えるべきであろう。

さて、「顔」には、慣用化された表現とも思われる、「笑顔」「したり顔」「真顔」といった用法もある。これは、視覚体験的に捉えられた「顔」の表現が、慣用表現として定着したものである。

- (37) 死の直前でも笑顔を見せようと彼は平生から思っていたのだ。

(『侍』：19)

He had always wanted to wear a smile even as death approached.

(*The Samurai* : 19)

- (38) 西九助がしたり顔で御壮拳の真意を話すのを侍と田中太郎左衛門とは気おくれしながら聞いていた。 (『侍』：75)

The samurai and Tanaka Tarozaemon listened diffidently as Nishi spoke of this true purpose of this great undertaking.



(*The Samurai* : 55)

(39) 「あの天智院に何かあったのでしょうか？」

助役は急に心配顔になった。 (『戸隠伝説殺人事件』: 308)

“Has she done something again?” asked the official, looking suddenly worried. (*The Togakushi Legend Murders* : 243)

次は、逆に、日本語訳に「……顔」が表れている例である。

(40) Margot said thoughtfully, (*The Money Changers* : 207)

マーゴットが思案顔で言った。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 303)

(41) Danny nodded sagely. (*The Money Changers* : 394)

ダニーは得意顔でうなずいた。

(『マネーチェンジャーズ (下)』: 219)

(42) Langdon nodded, his expression serious.

(*The Da Vinci Code* : 175)

ラングドンは真顔でうなずいた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 5)

これらに相当する英語の慣用表現は存在しないと思われるが、これらの例について興味深いことは、これらの「○○顔」の箇所に相当する英語表現は、英語原文であれ、英語訳であれ、face が用いられていないということである。このことも、〈顔〉が視覚体験として捉えられやすいことの表れと言えよう<sup>6)</sup>。

次の「顔だち」「顔付き」も、「顔」のもつ体験性の意味合いが反映された表現と思われる。

- (43) いずれも鳥のような顔だちをしており、彼らは使者衆と向き合って床几に腰をおろした。 (『侍』：64)

Their angular faces reminded the Japanese of crows. They sat on the stools, facing the envoys. (*The Samurai* : 48)

- (44) 総入れ歯の口許をキュッと引き締めて、もう何も言うまいという顔付きになった。 (『戸隠伝説殺人事件』：305)

She clamped shut her mouth full of false teeth and looked like she was not going to say another word.

(*The Togakushi Legend Murders* : 241)

(43) の「顔だち」の英訳に対しては、face の語が用いられているが、これは、英語では、「顔」と「顔だち」を区別し得ないということである。

もちろん、このような〈顔〉に対する多様な表現は、次のような日本語訳にも表れる。

- (45) In his early twenties, he had an intelligent face and was neatly dressed, his short hair parted and carefully brushed.

(*Hotel* : 37)

年は二十二、三歳。利口そうな顔立ちで、短い髪をきちんと分け、服装も立派だった。 (『ホテル (上)』：60)

- (46) From the anxious look on the agent's face, Collet could only guess.

(*The Da Vinci Code* : 392)

捜査官の不安げな顔つきから、コレは推測した。

(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』：96)

「顔おれ」も、この種の表現に付け加えられよう。

(47) , as his eyes passed over the group.

(*The Money Changers* : 4-5)

出席者の顔ぶれを見まわした。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 8)

これまで述べてきたことから、「顔」は、身体部位の中で、最も salient な地位を占めることから、日本語表現において最もよく用いられる視覚体験名詞であると言えることができるように思われるが、一見、これに反すると思えるようなデータがある。秋元 (2006) は、日本語と英語の身体語彙を含む慣用句を論じたものであるが、その中で、『例解新国語辞典第 6 版』で見出し語として載っている身体語彙の慣用句数について報告している。それによると、1 位が「目」の 80 個で全体の 20%、あと、「手」「口」「足」「胸」の順で続き、「顔」は 14 個の 9 位で、これは全体の 3 % であるとしている。「顔」が身体部位で最も目立つものであるのならば「顔」の慣用句数も多いのではないかと予想されるが、秋元のデータでの「顔」の少なさは意外とも思えるものである。しかし、この「顔」の慣用句の中には、「顔立ち」「顔つき」や「真顔」「笑顔」等は含まれておらず、また、そもそも、慣用句として固定している「顔が売れる」等の表現においては、「顔」そのものに修飾語句をつけることができないのである。よって、身体語彙が、視覚体験的に用いられているかどうかは、すでに引用としてあげた「本気で感心したような顔」「意外そうな顔」「怪訝な顔」のように、その語が、修飾語句によって修飾されているかどうかのテストによってのほうが、この問いに対する答えを得ることができると言えよう。次は、秋元 (2006) で挙げられている身体語彙の慣用句として用いられている上位 10 位までの身体語彙について、E-DIC (朝日出版社) の中から、「……な○」で、ヒットした数を表したものである。

(48) E-DIC で、「……な○」で現れる身体語彙の例文数

顔	口	目	手	鼻	胸	耳	足	腹	腰
87	47	46	32	4	2	1	1	0	0

もちろん、これは、あくまで、E-DIC という限られた資料と、さらに、「……な○」という限られた構文だけからのものとはいえ、少なくとも、身体部位の中でも、「顔」の視覚体験性の優位さを裏付ける資料であるとは言えると思われる。

## 4.2 「表情」

### 4.2.1 「表情」と expression が対応する場合

「表情」についても、日本語と英語で、表面的に対応している場合がある。まずは、日本語原文の「表情」に expression が対応する場合である。

- (49) この「うんざり」という表情は、貴子たちにとっては見慣れた表情のひとつだ。 (『凍える牙』：75)

That expression of sour disgust was familiar to her and her colleagues. (The Hunter : 42)

- (50) 巫女の表情に変化はなかった。 (『戸隠伝説殺人事件』：217)

Her expression did not change. (The Togakushi Legend Murders : 176)

次は、英語原文の expression が、日本語で「表情」と訳出されている場合である。

- (51) Responding to their shocked expressions, he told them,

(*Hotel* : 52)

彼らの愕然たる表情につられて、説明をつづけた。

(『ホテル (上)』 : 81)

- (52) Since they started, teller's facial expression had seemed either sulky or hostile. (*The Money Changers* : 33)

彼女の顔に浮ぶ表情は最初から一貫して不機嫌か、敵意を含んでいるかのどちらかだった。(『マネーチェンジャーズ (上)』 : 50)

しかし、「表情」と expression が対応している場合であっても、先の (35) (36) の「顔」と face が対応している場合のように、これらの「表情」には、「体験的」な意味合いが含まれていると言うべきであろう。この点では、「表情」は「顔」より、「体験性」の度合いが高いと言えるかもしれない。

#### 4.2.2 「表情」に対応する英語表現がない場合

次が、本稿で問題にしている、「表情」と英語表現に対応がない場合である。まずは、「表情」が用いられた日本語原文に対し、英語では、「表情」に対応する名詞表現が表れていない場合である。

- (53) 美容師は眉根を寄せて真剣な表情で写真に見入った。

(『凍える牙』 : 115)

Frowning, the guy studied it intently. (*The Hunter* : 65)

- (54) 男の顔に初めて不安気な表情が浮かんだ。(『凍える牙』 : 225)

...he inquired, showing unease for the first time.

(*The Hunter* : 119)

- (55) 「使うがいい」私が言った時、この申し出が信じられぬという表情で私を見つめた。(『侍』 : 99)

‘Use these’, I told him, but he stared at me as though he could not believe what I had said. (*The Samurai* : 72)

- (56) 私の皮肉に田中は眼をそらせ、長谷倉は当惑した表情をみせた。  
(『侍』：145)

Tanaka averted his eyes at my irony. Hasekura looked most uncomfortable. (*The Samurai* : 101)

- (57) ここまで話して、優子は少し言葉を跡切らせ、悲しげな表情を浮かべた。  
(『戸隠伝説殺人事件』：133)

Here Yuko paused, looking very sad.  
(*The Togakushi Legend Murders* : 110)

- (58) 「まあ、そんなことを申しましたですか……」桂は少し困ったような表情を浮かべた。  
(『戸隠伝説殺人事件』：223)

“Oh dear! Did she tell you that?” Katsura looked a little embarrassed. (*The Togakushi Legend Murders* : 181)

また、次は逆のパターンとして、英語原文では「表情」に相当する語句がないのに、日本語訳では、「表情」が新たに付け加えられている例である。

- (59) Abjectly Tom Earlshore nodded. (*Hotel* : 187)  
老バーテンダーは卑屈な表情でうなずいた。

(『ホテル (上)』：279)

- (60) There was a responsive gleam of humor, then chagrin.  
(*Hotel* : 207)

若いフランス人の目が笑ったが、すぐ残念そうな表情になった。

(『ホテル (下)』：23)

- (61) he glanced pointedly around the room, ...

〈顔〉を表す視覚的体験名詞をめぐって

(*The Money Changers* : 7)

彼は険しい表情で室内をぐりと見まわした。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 12)

(62) As she saw his surprise, she added quickly, ...

(*The Money Changers* : 305)

そして彼の驚きの表情を見ると、急いでつけ加えた。

(『マネーチェンジャーズ (下)』: 81)

(63) The man glanced down at his weapon, looking almost amused.

(*The Da Vinci Code* : 5)

男は楽しげな表情で銃に視線をやった。

(『ダ・ヴィンチ・コード (上)』: 10)

(64) When he turned, there was an uncertainty about him.

(*The Da Vinci Code* : 464)

振り返ったとき、顔には不安げな表情が浮かんでいた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (下)』: 220)

これらの例における「表情」の使用は、日本語原文の場合であれ、日本語訳の場合であれ、先に論じた「顔」の場合と同様、〈顔〉が持つ〈表情〉の視覚体験によるものと思われ、「表情」の語は、体験的に用いられていると言えよう。特に、(64)については、「顔」や「表情」を用いない日本語訳は不可能とさえ言えるかもしれない。また、「表情」の語と共に、(54) (60) の「そうな」や、(58) の「ような」のように、語り手の主観を表す語句が共起しやすいことは、「顔」の場合と同様である。

#### 4.3 〈顔〉を表すその他の表現

日本語には、「顔」「顔付き」「顔立ち」「表情」以外にも〈顔〉を表す多様な表現形式があるが、このことも、「場面内視点」においては、

〈顔〉が最も優位な身体部位として捉えられることを考慮すれば当然とも言えることである。とりあえず、「面」と「色」について見てみることにする。

#### 4.3.1 「面」

まずは、「面（つら）」の日本語原文の例である。

- (65) 人々は砂粒や埃から目を守ろうと、しかめ面で行き過ぎた。  
(『凍える牙』：5)

, and passersby screwed up their faces to keep the sand and dust from getting into their eyes. (*The Hunter* : 5)

- (66) 脹れ面になっている智子を一瞥しただけで、……  
(『凍える牙』：245)

With barely another glance at her sister's pouting face,  
(*The Hunter* : 129)

- (67) 小島は興奮した面持ちで戻ってきて、……  
(『戸隠伝説殺人事件』：346)

He came back to the table looking excited ...  
(*The Togakushi Legend Murders* : 273)

(65) と (66) では、英訳に face が用いられているが、これは、先の「顔」と「顔立ち」の場合と同様、英語では、「顔」と「面」を区別する語がないということである<sup>7)</sup>。

次は、日本語訳に、「面」が表れている例である。

- (68) She said doubtfully, “In what way?” (*Hotel* : 93)  
「たとえば、どんなふうにして？」彼女はやや不安な面持で訊き



かえした。 (『ホテル (上)』: 140)

- (69) He was grinning broadly, ... (The Money Changers : 199)

彼は満面に笑みを浮かべながら、……

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 290)

- (70) French, burly and scowling,... (The Money Changers : 200)

しかめっ面をしたフレンチが……

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 291)

特に、(68) では、“said doubtfully” という、「話し方」について述べている語句が、「不安な面持で」と、視覚的に捉え直されていることが注目される。

次は、「仏頂面」とその英語の対応表現である。

- (71) 妹の甘えた顔も、滝沢の仏頂面も、何も見たくない。

(『凍える牙』: 199)

She didn't want to lay eyes again on Takizawa's grouchy face or her sister's pleading face. (The Hunter : 107)

- (72) 田中もいつもの仏頂面をやめて西に笑顔を見せた。 (『侍』: 273)

Tanaka's customarily glum expression was gone, and he smiled at Nishi. (The Samurai : 179)

- (73) とたんに房江の仏頂面から白い歯がこぼれた。

(『戸隠伝説殺人事件』: 171)

Fusae's sulky look dissolved immediately into a toothy smile.

(The Togakushi Legend Murders : 141)

- (74) 実戸はニヤニヤ笑いながら、塚本の仏頂面を眺めた。

(『戸隠伝説殺人事件』: 298)

Shishido returned Tsukamoto's scowl with a sweet smile.

(*The Togakushi Legend Murders* : 236)

次は、日本語訳に、「仏頂面」が表れている例である。

- (75) the Vice-President said. He added pointedly, “And how discreet you are.”  
(*The Money Changers* : 235)

副大統領は言い、仏頂面でつけ加えた。「それから、どれだけ慎重にやるかというということもある」

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 347)

「仏頂面」の対応英語表現は、face、look、expression と対応しうる名詞が含まれた表現から、そうでない表現までまちまちであるが、「仏頂面」の持つ感覚的・体験的なニュアンスがすべて捨象された表現となっている。そもそも、「仏」の概念は、英語には存在しえず、「仏頂面」に対応する英語表現もないと言えよう。

#### 4.3.2 「色」

さらに、日本語には、〈顔〉を表す関連表現として、「顔色を窺う」や、「疲労の色」、「焦りの色」といった、「色」が用いられている事例が多く見受けられるが、そもそも、「色」は視覚によって把握されるものであり、この表現も、「場面内視点」における視覚体験の表れと考えられる。

まず、「色」の含まれた表現に対して、対応する英語表現がどのようなものか見てみることにする。

- (76) 医師の顔に、あからさまな軽蔑の色が浮かんだ。

(『凍えた牙』: 75)

Ignoring the young doctor's undisguised scorn,

(*The Hunter* : 42)

- (77) 後藤が姿を消したあと二人の役人は露骨に不満の色を顔にみせて  
..... (『侍』: 22)

After Lord Goto had withdrawn, the two officials, their faces  
showing open displeasure, ... (*The Samurai* : 21)

- (78) 旅の疲れで消耗しきった三人は不意打ちを受けたように大きな驚きの色を顔に見せた。 (『侍』: 187)

Drained by the weariness of the journey, the three envoys  
seemed almost stunned by this unexpected piece of news.

(*The Samurai* : 126)

- (79) 「母、ですか……」桂は当惑の色を隠さなかった。

(『戸隠伝説殺人事件』: 225)

“My mother?” Katsura was obviously embarrassed.

(*The Togakushi Legend Murders* : 182)

これらの英訳においては、「色」が表す視覚性は表現されておらず、体験的印象が薄れた分析的なものとなっている。さらに、(76) (77) (78) では、日本語原文の「顔」が英訳されていないことも注目されよう。

次は、逆のパターンで、日本語訳に、「色」が表れている例である。

- (80) “Oh no!— not him.” Albert Wells’ face mirrored genuine concern. (*Hotel* : 110)

「えっ、あいつがかい？ そりゃいかん！」ウェルズの顔がはげしい関心の色を示した。 (『ホテル (上)』: 165)

- (81) A flicker of relief crossed the elderly barman’s face;

(*Hotel* : 187)

老バーテンダーの顔に安堵の色が浮んだ。(『ホテル(上)』：280)  
(82) Now, however, Tottenhoe appeared tired.

(*The Money Changers* : 101)

しかし、トートノーは疲労の色をにじませていた。

(『マネーチェンジャーズ(上)』：149)

(83) Sophie recoiled. “How do you know that?”

(*The Da Vinci Code* : 333)

ソフィーは動揺の色を見せた。「どうしてわかったの？」

(『ダ・ヴィンチ・コード(中)』：272)

これらの「色」に関わる表現で興味深いことは、英訳であれ、英語原文であれ、「色」に対応する表現として、colour は用いられていないということである。「色」を用いた表現のほうが、視覚的に豊かであり、描写がより生き生きしたものとなっていることは言うまでもない。

#### 4.4 まとめ

これまで、「顔」「表情」「顔だち」「顔つき」「面」「面持ち」「色」といった、〈顔〉に関わる「体験的」名詞表現の豊富さについて見てきた。結局、なぜ、〈顔〉を表すこのような多様な表現があるのかといえば、「場面内視点」においては、〈顔〉のもつ様々な〈表情〉が視覚体験的に把握されやすく、そのため、様々な表現が発達してきたと考えられる。一方、英語には〈顔〉に関わる多様な表現がないのは、英語が「場面外視点」の言語であり、〈顔〉の多様性は、捉えの対象とはなっていないためであるということになる。

### 5 「姿」

次は、「姿」についてである。「姿」については、次のように、「姿」と

figure が、対応している場合がある。(84) は日本語原文の「姿」に対する英訳としての figure であり、(85) は英語原文の figure に対して日本語訳に表れた「姿」である。

- (84) 低く垂れこめている灰色の雲の下を、滝沢の目の前を走って行く音道の姿は、いかにも寒そうで、ちっけに見えた。

(『凍える牙』：484)

Otomichi's figure riding in front of Takizawa and Imazeki, under the low-hanging bank of gray clouds, looked exceedingly small and cold.

(*The Hunter* : 253)

- (85) She didn't question how, so mysteriously, this slim, slow-walking figure had materialized. (*Devices and Desires* : 7)

ヴァレリーは、ゆっくり歩く細心の姿がなぜ降って湧いたように現われたのか不思議に思わなかった。(『策謀と欲望』：17)

しかしこのような対応関係にある場合でも、「表情」と expression の場合のように、「姿」と figure では、意味の上では、かなり、ズレがあると言うべきであろう。広辞苑(2008)は、「姿」の語義として、「体つき・見なりなど、形あるものの全体的な外見・様子」を挙げているが、「姿」の持つ、語り手が現場で把握する「外見・様子」の感覚的ニュアンスを、figure は持ち得ていないと言うべきである。

次が、本稿で問題にする、「姿」に対する英語の対応表現が見当たらない場合である。まずは、日本語原文での「姿」に対し、英語には、対応する語が表れていない場合である。

- (86) 滝沢は貴子の姿を認めるなり、つんと澄ました顔になって「よろしいですか」と言った。(『凍える牙』：194)

As soon as she got back, he stood up with a cool, standoffish air. “Ready now?” (The Hunter : 104)

- (87) さらに、植え込みの上を跳ぶ姿に思わず「すごい！」と歓声を上げた。 (『凍える牙』: 469)

; seeing him fly through the air above the shrubbery, she couldn't hold back the thrill, the wonder. (The Hunter : 245)

- (88) 叔父の姿が見えなくなるまで犬が吠えた。 (『侍』: 10)

A dog barked until the samurai's uncle had disappeared from view. (The Samurai : 13)

- (89) そしてとじられた扉からふたたび姿を見せなかった。 (『侍』: 300)

Once the doors closed behind them, they did not reappear. (The Samurai : 196)

- (90) 天童タキの姿はなかった。 (『戸隠伝説殺人事件』: 359)

Taki was not there. (The Togakushi Legend Murders : 283)

次は、逆のパターンとして、英語原文に「姿」に相当する表現はないが、日本語訳に「姿」が表れている場合である。

- (91) “I can see him in the lobby now.” (Hotel : 317)

「まだロビーに姿が見えますよ」 (『ホテル (下)』: 184)

- (92) A tall, lean man in a tweed jacket and drill trousers stepped forward. (Hotel : 387)

ツイードの上着に綾リンネルのズボン姿の長身の男が近づいてきた。 (『ホテル (下)』: 288)

- (93) Moments later she emerged through the main floor entrance-way, closing it carefully behind her.

(*The Money Changers* : 344)

間もなく彼女が一階の入口から姿を現わして、用心深くドアをしめた。  
(『マネーチェンジャーズ (下)』: 142)

- (94) “An honor.” Teabing moved into the light.

(*The Da Vinci Code* : 246)

「お目にかかれて光栄だ」ティービングは光のなかへ姿を現した。  
(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 122)

- (95) As he fell, he saw the whole tree for the first time.

(*The Fall of Freddie the Leaf*)

そのときはじめてフレディは 木の全体の姿を見ました。

(『葉っぱのフレディ』)

「姿」については、「「……の姿」は英語では、訳出しないことも多い」。あるいは、「日本文での「姿」が「消える」「現れる」などの出現・消失に関する動詞の目的語となる場合、英語では自動詞 1 語で表現されるのが普通」(『Wisdom 和英辞典』2007: 877) との指摘が既になされているが、その理由についても、本稿での、「場面内視点」と「場面外視点」による説明が可能である。そもそも、現場における人の「出現・消失」は、知覚者にとっては、最もインパクトのある事象であり、「場面内視点」では、「体験的」に把握されることは十分に考えられる。「姿」は、まさに、「目に見える範囲」による把握の表現なのである。一方、「場面外視点」から、把握される英語においても、人は、事象の多くのモノの中で、最も目立つモノである点は同じである。しかし、その目立ち度は、他のモノとの論理的・分析的な関連づけの把握における、trajectory や landmark としての位置づけなのであり、「外見・様子」としての把握ではないのである。

「姿」には、次のような「後ろ姿」の表現もよく見出される。

- (96) 滝沢は、ブルゾンの背中を膨らませて走る音道の後ろ姿を見つめた。  
(『凍える牙』：461)

Takizawa kept his eyes on Otomichi's back, her blouson blowing in the wind like a sail. (*The Hunter* : 241)

- (97) 貴子は、息苦しくなるような思いで、その後ろ姿から目を逸らした。  
(『凍える牙』：481)

Feeling a sudden choking sensation, Takako followed his retreating figure with her eyes. (*The Hunter* : 251)

- (98) 医師の後ろ姿を見送ると、滝沢は吐き捨てるように呟いた。  
(『凍える牙』：77)

Takizawa muttered under his breath, scowling, as he watched the doctor walk down the corridor. (*The Hunter* : 43)

- (99) 一人ですたすと歩いていく相方の後ろ姿を追うように、滝沢はやっとの思いで歩き始めた。  
(『凍える牙』：324)

As his partner marched off alone, Takizawa tried to wake up and to follow her. (*The Hunter* : 170)

- (100) 煙草ならば、勝手に吸ってくればよいではないかと思って、貴子が後ろ姿を見送っていると、滝沢は途中で立ち止まって振り返る。  
(『凍える牙』：344)

If you want to smoke, go on and do it by yourself, she thought, watching him go off, but midway down the corridor he stopped, turned around, and looked back at her.

(*The Hunter* : 180)

次は、日本語訳に、「後ろ姿」が表れている例である。

- (101) Sophie stared after him a moment,



〈顔〉を表す視覚的体験名詞をめぐって

(*The Da Vinci Code* : 201)

ソフィーは、その後ろ姿を目で追いながら考えた。

(『ダ・ヴィンチ・コード (中)』: 48)

(96)-(100) の5つの例文はすべて、同じ小説にある日本語原文とその英訳からのものであるが、「後ろ姿」を、(96) は back、(97) は retreating figure と表しているが、(98)(99)(100) の英訳では、「後ろ」に相当する内容は訳出されていない。英語では、「後ろ姿」に対応するイメージもなければ、定まった表現もないのである。そもそも、「後ろ姿」が醸し出す「未練」のイメージは、「視点」が「場面内」にあってこそ、はじめて可能となる概念であると言える<sup>8)</sup>。「場面外」にあっては、「後ろ姿を見送る」イメージはないのである。その点では、「後ろ姿」が付け加えられた(101)の日本語訳は興味深い。

また、次の例は、「姿」の有る無しが、同じ文脈に表れている注目すべき例である。

(102) あらためて、しげしげと優子の姿を眺めた。

(『戸隠伝説殺人事件』: 176)

Again he looked hard at Yuko.

(*The Togakushi Legend Murders* : 144)

(103) 飽くことなく優子を眺めているうちに、……

(『戸隠伝説殺人事件』: 177)

Unable to get enough of looking at her, ...

(*The Togakushi Legend Murders* : 145)

まず、(102) では、現実に入った「優子」の視覚的印象が「姿」を用いて述べられている。しかし、(103) では、「姿」はもう問題にされず、

「優子」だけの表現となっている。一方、英訳ではどちらも、Yuko と her で表されており、「姿」の有無による意味合いの違いは反映されていない。

さらに、次の例を見てみよう。

- (104) 「しかし、それにもかかわらずお姿が見えないというのは、むしろ心配じゃありませんか。」 (『戸隠伝説殺人事件』：318)

“All the same, though, we don't know where he is,” said Izawa, “and if he's still in the hotel, then I'd say we have even more to worry about.”

(*The Togakushi Legend Murders* : 252)

この例においては、「姿」と単なる代名詞の he の対比に加えて、「見る」と“know”（「知る」）の対比が興味深いと言える。「場面内視点」では、「姿」は「見る」ことができるが、「場面外視点」での「tr/lm 型認知」では、「見る」対象ではなく、「知る」対象であるとも言える。この違いは、「知る」言語と「見る」言語の違い、すなわち、牧野 (1996 : 34) のいう「知性中心の分析」の言語と「感性そのものの理解」の言語の違いにつながると言えるかもしれない。

## 6 「顔」「表情」「姿」以外の「体験名詞」

これまで、〈顔〉に関わる「顔」「表情」「色」や、〈人〉に関わる「姿」といった視覚的体験名詞について述べてきたが、ここで、これ以外の「体験名詞」についてもふれておきたい。他の体験名詞としては、「様子」「雰囲気」「気配」「調子」「気持ち」「気分」「口調」といった名詞が考えられる。以下に、これらの語句の日本語原文と日本語訳の例を、それぞれ、1 例ずつあげておく。

・「様子」

- (105) 女性関係は複雑だった様子だが、…… (『凍える牙』：134)  
His relation with women were complicated, ...  
(*The Hunter* : 74)
- (106) Warren Trent said huffily, ... (Hotel : 68)  
トレントはピーターの返答が気にさわった様子で、……  
(『ホテル (上)』：103)

・「雰囲気」

- (107) たまに顔を合わせても、どうも気まずい雰囲気になることが多かった。  
(『凍える牙』：419)  
; whenever they were together, there was a strained awkwardness.  
(*The Hunter* : 220)
- (108) The meeting was breaking up. In contrast to the earlier accord, there was a sense of constraint and awkwardness.  
(Hotel : 369)  
会談は、途中までの和気あいあいたる雰囲気が一変して、気まずい空気の中で終わった。  
(『ホテル (下)』：262)

・「気配」

- (109) 背後でお嬢さんの動く気配がする。 (『凍える牙』：400)  
Behind him, Takizawa could sense Otomichi's nervousness.  
(*The Hunter* : 211)
- (110) Juanita felt movements, heard a cloth-like substance tear.  
(*The Money Changers* : 444)  
ファニータは男たちが動く気配を感じ、布を引き裂くような音を聞いた。  
(『マネーチェンジャーズ (下)』：292)

・「調子」

- (111) つい、いつもの調子で独り言を言ってしまった後、ふと横を見て、滝沢は思わずしまった、と思った。 (『凍える牙』：130)

Takizawa said his thoughts aloud as usual, and then, with a sideways glance at Otomichi, caught himself. Damn.

(*The Hunter* : 72)

- (112) Remembering Wainwright's advice — “don't hurry, be patient” — Miles decided not to push his luck.

(*The Money Changers* : 398)

ウェインライトの忠告 — 「あわてるな、辛抱強くやれ」 — を思いだして、マイルズは調子に乗り過ぎないように注意しようと決心した。 (『マネーチェンジャーズ (下)』：223)

・「気持」

- (113) 貴子は、久しぶりに挑戦的な気持ちで、電車に揺られ続けた。

(『凍える牙』：122)

Newly defiant, Takako sat swaying with the motion of the train.

(*The Hunter* : 68)

- (114) Alex murmured uneasy agreement.

(*The Money Changers* : 141)

アレックスは不安な気持ちで同意を示した。

(『マネーチェンジャーズ (上)』：208)

・「気分」

- (115) 貴子は、その報告を聞いた途端に、暗澹たる気分にさせられた。

(『凍える牙』：246)

Hearing this plunged Takako into gloom.

(*The Hunter* : 131)

- (116) Ogilvie was contentedly relaxed. (*Hotel* : 321)

オガルヴィーは満足し、すっかりくつろいだ気分になった。

(『ホテル (下)』: 188)

・「口調」

- (117) 立花はタキの柔らかな体を小さく揺すりながら、優しい口調で訊いた。

(『戸隠伝説殺人事件』: 15)

he asked gently, rocking her in his lap.

(*The Togakushi Legend Murders* : 15)

- (118) Tottenhoe said morosely, (*The Money Changers* : 31)

トートノーが不機嫌な口調で言った。

(『マネーチェンジャーズ (上)』: 47)

これらの「体験名詞」は、この名詞の中の「気」や「調」の語が示しているように、語り手によって、感覚的・体験的に把握された語であると言える。これらの「体験名詞」で興味深いことは、「様子」は見る対象として捉えられ、「見える」が用いられるのは当然として、感覚として捉えられるべきである「雰囲気」「気配」といった他の「体験名詞」の場合も、以下の例が示すように、「見える」の把握対象となり得ているということである。

次は、今述べた体験名詞が（「口調」の例を除き）、視覚対象として捉えられ、「見える」が後続している例である。

- (119) 母親の方が、かなり弱っている様子に見えた。

(「驟り雨」『驟り雨』: 139)

, and the mother was obviously very weak.

(“A Passing Shower” *The Bamboo Sword* : 54)

- (120) 和田の方は、まるで潮干狩りでもしているような雰囲気に見える。  
(『凍える牙』: 45)

Wada's getup reminded Takizawa of a clam-digger.

(*The Hunter* : 27)

- (121) 外には、まだ朝の気配さえ漂っていないように見えた。  
(『凍える牙』: 320)

There was still no sign of morning. (*The Hunter* : 169)

- (122) There was seldom any hedging.  
(*The Money Changers* : 321)

責任を回避するような曖昧な調子はめったに見られなかった。

(『マネーチェンジャーズ (下)』: 105)

- (123) ハルはいよいよ口が固くなってきた。竹村に早く帰ってもらいたい気持ちがありありと見て取れる。

(『戸隠伝説殺人事件』: 306)

This time she clammed up for good, obviously anxious for him to leave. (*The Togakushi Legend Murders* : 242)

- (124) 本部に戻ってきても、とても以前のように肩肘を張って自分で報告書を書く気分にもならないと見える。(『凍える牙』: 299)

Back at headquarters, there was none of his old arrogant insistence on writing up the reports himself.

(*The Hunter* : 158)

これらの事例も、日本語表現の視覚の優位性を示すものと言うことができよう。

これまで論じられてきた「体験名詞」の使用は、結局のところ、語りの現場での〈見え〉に対する語り手の体験を表わしたものと言える。こ

これらの名詞の使用が、「やがて」や「S1とS2」「そうな」「ような」といった体験表現と同様、コンテキストの共感性に貢献していることは言うまでもない。読者が共感するのは、分析的、抽象的なものに対してではなく、あくまで語り手の主観的、体験的な要素に対してであるからである。日本語は、主観的な言語であるとは、つとに、指摘されてきたことではあるが、これまで論じられてきた「体験名詞」も、日本語表現の「体験性」という大きな枠組みの中に、位置付けられるべきであるように思われる。

## 7 〈見え〉の体験の表れとしての日本語と日本文化の関連性

「場面内視点」においては、視界は、「場面内」に限定されるところから、局所的で狭いものとならざるを得ない。しかし、逆に、限られた範囲内であれば、その中での〈見え〉には敏感であることになる。これまで本稿で論じてきた〈顔〉を表す多様な表現は、現場の〈見え〉への視覚的鋭敏さから生じたものである。また、「気配」や「雰囲気」といった体験名詞表現も、「場面内視点」での、周囲の〈見え〉への鋭敏な感覚体験を表す語と考えられる。一方、「場面外視点」である英語では、〈見え〉を体験することもなく、日本語のような体験表現は存在しないことになる。なぜなら、〈見え〉の体験には、あくまで、視点が現場にあることが求められるからである。

このような、〈見え〉の体験にこだわる日本語表現と、〈見え〉の体験がない英語表現が、日本語文化と英語文化に、少なくとも、何らかの点で、関わり合っていると考えることは自然なことであるように思われる。つまり、日本文化は、〈見え〉の体験にこだわる視覚的な文化であるのに対し、英語文化は、〈見え〉よりは、実質的な中身にこだわる文化であると予想することは十分可能なことではないだろうか。

確かに、このような〈見え〉に対する日本語文化と英語文化の違い

は、様々な面に表れていると思われる。例えば、日本語は、平かな、片かな、漢字、ローマ字との四種類の文字を使用しているが、このことについて、牧野(1978:104)は、日本人の視覚的な多様化への好みによるものとし、アメリカの新聞よりも日本の新聞の方が小綺麗で見た目にすっきりしていることについても、視覚型文化の表れとしている(牧野1978:103)。見た目への配慮という点に関連して言えば、絵本は普通の文庫本やペーパーバックと異なり、文字スペースにはかなりの余裕があるが、それでも、英語版と日本語版を比較した場合、英語の絵本においては表面的な活字のレイアウトにはそれほど関心を示していない場合が見受けられる<sup>9)</sup>。英語版の *The Fall of Freddie the Leaf* と日本語版の『葉っぱのフレディ』を比べても、日本語版のほうが、はるかに〈見え〉の配慮が行き届いたレイアウトと段落構成となっているのに対し、英語版がそのようになっていないことについては、絵本についても、〈見え〉よりは、メッセージの伝達に主眼が置かれているためと説明されるかもしれない。

また、料理のことを取りあげるならば、日本料理は、西洋料理や中華料理に比べれば、食器や盛り付け等の〈見え〉にこだわる面が多いと言える。このことに関連して、レストランなどで日常しばしば目にするサンプル食品が日本でしか見られないという指摘は興味深い(小笠原2006:70)。なぜなら、サンプル食品はあくまで視覚対象としてしか存在し得ないものだからである。

日本の商品には包装の文化とでも言われるべきものがあるが、西洋文化においては、これに相当するものはないと思われる<sup>10)</sup>。このことについても、商品の中身の〈実質的〉なものよりは、表面的な〈見え〉へのこだわりが関わっているように思われる。また、「切手」等についても、英語圏のものよりは、日本の切手のほうが、はるかに、芸術的に優れているように思えるがどうであろうか。



また、あえて、本稿で論じた〈顔〉との関連で述べるならば、仏像については、仏の〈顔〉の慈悲深さ等が論じられるのに対し、磔にされたキリスト像は、かなりの程度まで象徴的なものとしての像であり、日本の仏像ほどは、キリスト像の〈顔〉の慈悲深さ等については取り上げられないようにも思われる。このことは、本稿で論じた、日本語では、〈顔〉の〈見え〉の多様な表現があるのに対して、英語では、〈face〉を表す表現が乏しく、このことは、〈face〉が、人の心理状態の〈見え〉の体験としては捉えられないことと並行する現象として指摘され得るかもしれない。

このような、「場面内視点」から生じる〈見え〉へのこだわりは、日本人の行動様式にも関わり合っているのではないだろうか。例えば、日本人が服を選ぶときの一つの規準に、自分の服装がどのように他人に見えるかということがあると言われている。しかし、英語話者は、各自が独自の規準で、思い通りの服装をしているのであり、どのように他人から見られるかについてはこだわらない。このことも、「場面外視点」であるがゆえに、〈見え〉にはこだわらない文化の一端を表していると言える。もちろん、〈見え〉のこだわりは服装だけではない。日々の様々な行動ですら、日本人は、とかく、周囲の目を気にしがちであるが、これも、広い意味での〈見え〉へのこだわりと言えるかもしれない<sup>11)</sup>。

このような行動様式は、牧野 (1996: 35) が視覚型文化の特性として挙げている次の引用と重なり合うものである。

- (125) ある(無)生物(人間を含む)がどう見えるか、どう感じられるかに、高度の注意を払う。特に、他人を判断する時に視覚的手掛かりを重視する。自分を判断するとき、他人の目を大変気にする。

もちろん、この視覚型の行動様式は、「場面内視点」による〈見え〉への体験から生じるものと考えられる。

〈見え〉の体験へのこだわりとしての日本語表現と、〈見え〉の体験がない英語表現は、日本語表現のプロセス志向と英語表現の結果志向の違いにもつながる<sup>12)</sup>。

例えば、次は、日本語原文のプロセス表現が、英語では結果表現に訳されている例である。

- (126) ゆうだちのように、おゆがふってきた。みると、くじらだ。かばのからだについていたあわが、どんどんきえて ながれていく。  
(『おふろだいすき』)

When we turned around, there was a whale! Thanks to his shower all the bubbles on the hippopotamus' body and mine were gone in no time.  
(*I Love to Take a Bath*: 26)

視点が「場面内」にある日本語においては、「どんどんきえて ながれていく」という、現場で進行しつつある一瞬一瞬の〈見え〉のプロセスへの視覚体験に焦点が置かれた記述となっているのに対し、視点が「場面外」にある英語の対応表現は、〈見え〉への体験がないため、プロセスが捨象され、結果に焦点が置かれた記述となっていると説明されよう。

このような日本語のプロセス志向と英語の結果志向も、様々な点で日本人の行動様式に、関わり合っていると思われる。例えば、野球において、「日本が区切りの数字にこだわり、アメリカは記録と人にこだわる」との指摘は興味深い<sup>13)</sup>。具体的には、この引用は、日本では2000本安打という区切りの数字が話題とされるのに対し、アメリカではほとんど話題とはされず、アメリカで話題とされるのはメジャー記録の場合だけであるということを述べたものである。プロセス志向と結果志向の観点

から言えば、2000 本安打といった区切りの数字は、あくまで、通過点としての〈今〉のプロセスにこだわったものであるのに対し、メジャー記録は、新記録という〈結果〉にこだわったものとも言えよう。

また、牧野 (1978: 22) の指摘する、運転免許を取るプロセスの違いにも興味深い。日本では、自動車教習所の箱庭的自動車道路で練習するのに対し、アメリカでは、いきなり仮免が発行されて外に出て実地で学ぶとしているが、このことも、プロセス型と結果型の違いによると言えるかもしれない。しかし、ややもすれば、プロセス型は、プロセス自体に焦点がいくことにもなりかねず、日本人が、従来慣例を無視した大胆な行動を取りにくいとの指摘は、日本語の「場面内視点」の持つ、視野の狭さが関わっている可能性は十分にあると思われる<sup>14)</sup>。

また、よく、スポーツ等において、日本においては、すぐれた才能をもった天才型の人間よりは、日ごろの努力、訓練を怠らない努力型のタイプの人間のほうが、評価される傾向があるようにも思われるが、このことについても、プロセス志向の日本語と、結果志向の英語の違いが何らかの点で関わり合っているようにも思われる。目前の仕事をひたすらこなしていく、いわゆるコツコツタイプのプロセス型の行動様式は、「場面内視点」を持つ日本語を母語とする日本人に根付いた行動様式であるとも言えよう。先の 6 節で、「読者が共感するのは、分析的、抽象的なものに対してではなく、あくまで語り手の主観的、体験的な要素に対してであるからである」と述べたが、このことは、行動様式についても当てはまるのかもしれない。つまり、プロセス型の行動様式が日本人に好まれるのは、プロセスが視覚体験されうるものであることと関わりがあるように思われる。つまり、行為者が体験するプロセスは、〈見え〉として体験されるために、より共感しやすいものとなるのではないだろうか<sup>15)</sup>。

〈見え〉にこだわるということは、また、こよなく、〈今〉にこだわる

ということでもある。なぜなら、〈見え〉の体験とは、〈今〉の〈見え〉の体験に他ならないからである。日本人がカメラ好きであることはよく指摘されるが、カメラの魅力は、〈見え〉へのこだわりと〈今〉へのこだわりの双方を同時に満たすところにあると思われる。熊倉 (1990 : 28) は、日本人にとってのカメラの魅力として、〈現実感〉と〈写実性〉を挙げているが、〈現実感〉と〈写実性〉とは、それぞれ、本稿での〈今〉と〈見え〉に相当すると考えられる。また、〈今〉へのこだわりは、〈今〉まきに行われているプロセスへのこだわりにも通じるものと考えられる。

〈見え〉へのこだわりが〈今〉へのこだわりでもあるとすれば、一瞬一瞬に過ぎゆく〈時の流れ〉に対しても、日本人は、自ずと敏感なものとならざるをえない。また、このような〈時の流れ〉は、〈今〉が絶えず更新されるものとして捉えられるので、日本人にとっては、いわば、「終わりのない道」(金谷 2004 : 46-49) が続くことにもなる。この「終わりのない道」は、多分に、見通しがきかない「場面内視点」から生じるものと言えよう。もっとも、「道」それ自体が「終わりがなく」「果てしなく」続くイメージを持つものであり、日本人に「道」のイメージが好まれるのは、「道」のもつこのプロセス志向が関わっているのではないかと推測することも可能であろう<sup>10)</sup>。このプロセス志向の表れとも言える「道」は、「みち」のみならず、「茶道」「華道」「柔道」「野球道」のような「どう」の場合にも当てはまるものである。

〈時の流れ〉の連続性と同じ原理によるものとして、1、2、3といった〈数の流れ〉も挙げられると思われるが、〈時の流れ〉にこだわるのであれば、〈数の流れ〉にもこだわるのが予想される。一郎、二郎、三郎といった命名は、英語文化では考えられないことである。また、〈数の流れ〉へのこだわりは、日本社会における「年功序列」といった現象にもつながると指摘することも可能であろう。

次の英語原文と日本語訳には、〈時の流れ〉を表す〈数の流れ〉に対す

る感覚の違いが表れていると思われ、興味深い。

- (127) and in and out of weeks  
and almost over a year  
to where the wild things are. (*Where the Wild Things are*)  
1しゅうかん すぎ、2しゅうかん すぎ、  
ひとつき ふたつき ひが たって、  
1ねんと 1にち こうかいすると、  
かいじゅうたちの いるところ。  
(『かいじゅうたちのいるところ』)

英語原文においては、〈時の流れ〉のプロセスに焦点はなく、あくまで「場面外視点」からの結果のみが記されているだけであるが、日本語訳では、「場面内視点」による、「1しゅうかん 2しゅうかん ひとつき ふたつき 1ねんと 1にち」と、絶えず、更新される〈今〉の体験が表現されている。いわば、〈数字の流れ〉それ自体が、体験されうる〈時の流れ〉の雰囲気を醸し出しているのである。

〈数の流れ〉へのこだわりは、映画のシリーズ物における、シリーズ第何作といった邦題のタイトルにも表れているようにも思われる。例えば、1970～1980年代にかけて製作されたクリント・イーストウッド主演の「ダーティハリー」シリーズでは、邦題ではすべて「ダーティハリー 2」「ダーティハリー 3」のように、「ダーティハリー」に数字が付けられたものとなっていた。シリーズ物としての同じタイトルの使用の利点は、映画の同じ雰囲気が伝えられ、かつ、映画の内容の連続性を示し得ることにある。一方、「ダーティハリー」シリーズのオリジナルタイトルは、第1作を除いては、“Dirty Harry”の名がなく、毎回別個のオリジナルタイトルがつけられていた。シリーズものの〈数字の流れ〉より

は、いわば、個々の映画の独立性が主張されていると言えるだろうか<sup>17)</sup>。映画のタイトルにおける〈数字の流れ〉について、もう一つ例を挙げるならば、これまた、シリーズものの映画である“007”の呼び方についても、日本人は、一方方向的に、〈数字の流れ〉に沿って、平面的に「ゼロゼロセブン」と読むが、英語では、「ダブルオーセブン」と読む。この英語の読み方は、ゼロが2つあるという事実を先取りした立体的な読み方である。

尾野 (2004) は、映画のタイトルの日英語の違いについて論じたものであるが、邦題のタイトルからは、どのような映画のジャンルかがわかるが、洋画の原題からは、どのような映画の内容なのかはわからない場合があると指摘している。例えば、『真昼の死闘』(1970) や『モンタナの風に抱かれて』(1998) といった邦題のタイトルからは、かたや西部劇、かたやラブロマンスの映画であることがわかるのであるが、これらの原題である“Two Mules for Sister Sara”(「尼僧サラの二匹のラバ」)、“The Horse Whisperer”(「馬にささやく人」) からは、一体、どのようなジャンルの映画なのかは全く予測不可能である。このことについても、「場面内視点」と「場面外視点」による説明が可能であるように思われる。「場面内視点」であれば、その現場のただ中にいることができ、ドラマかサスペンスかロマンスか西部劇かといったその映画特有の雰囲気を経験することができ、そのような現場の〈見え〉の体験を表す体験的なタイトルが可能となる。しかし、「場面外視点」にあつては、そのような現場の雰囲気を知覚することはできず、単に、場面外から、事象の中のモノが *trajector* や *landmark* として捉えられ、それが映画のタイトルとして用いられるということも起こり得る。そのような場合であれば、洋画の原題からは、どのようなジャンルの映画か、わからない事例もでてくるということにもなる。「体験性」と「分析性」の違いから生じる、この日英語の映画のタイトルの違いは、本稿で論じてき

た、〈顔〉をめぐる、日本語と英語の表現性の違いに平行する現象なのである。

また、日本文化における〈場〉へのこだわりについては、メイナード(2000: 353-375)で論じられているが、〈見え〉と〈今〉の源として存在するのが〈場〉であると思われる。〈今〉の〈見え〉とは、きわめて現実的かつ具体的なものであるが、この具体性は、あくまで、〈場〉の現場性に基づくものである。〈今〉と〈見え〉へのこだわりは、また〈場〉へのこだわりなのでもある。

日本語表現においては、必ず、具体的な場があるのである。次の例を見てみよう。

- (128) He had first appeared in Spring as a small sprout on a rather large branch near the top of a tall tree.

(*The Fall of Freddie the Leaf*)

葉っぱのフレディは この春 大きな木の梢に近い 太い枝に  
生まれました。 (『葉っぱのフレディ』)

英語では、‘Spring’とあるだけでいつの春かは不明であるが、日本語訳では、はっきり「この春」と具体的な場が設定されているのである。

〈見え〉と〈今〉と〈場〉は密接に関わっているが、これが意味するところは、「現実へのこだわり」である。この「現実へのこだわり」は、熊倉(1990: 38)が日本語構文の特徴としてあげている「現実の追及」につながるものとも言えよう<sup>18)</sup>。

## 注

- 1) 尾野(2008a, 2008b)での、「臨場的スタンス」「外置的スタンス」は、それぞれ、本稿での、「体験的把握」「分析的把握」に当てはまる。「体

「体験的把握」による表現は、「I モード表現」となるが、以下本稿では、「体験」の語を用いることにする。

最近では、「S モード」「O モード」(鍋島 2011) や、「事態内視点」「事態外視点」(町田 2011) といった用語も提案されている。

本稿での「体験」は、池上 (2004:23) での「〈体験〉とは発話の主体が直接自らの身体において事態を感知し、経験しているということ……」の意で使用している。また、牧野 (1978:175) は、英語の spacious、narrow が客観的な空間の把握であるのに、日本語の「広い」「せまい」は人の主観的な空間の把握を表すもので、「体感的」という語を用いているが、この「体感」は、「体験」にきわめて近いと思われる。

- 2) ただ、例外もある。本文の (15) (16) は、日本語原文の「顔」は英訳されず、また英語原文に face の語がないのに、日本語訳に「顔」が表れている例であるが、これは、描写における体系的な違いであり、ここでの「顔」は体験表現ではない。このような「顔」の用法は、修飾語句によって修飾されず、単独で生じるところに特徴があると言える。
- 3) もちろん、厳密には、「木」と tree は同じではない。これについては、柳父 (1979:210-212) を参照のこと。
- 4) (5) (6) での数字はあくまで傾向をつかむためのものであることをお断りしておきたい。ちなみに、日本語における体験名詞表現としては、「顔」「表情」「様子」「姿」「雰囲気」「気分」「気持ち」「口調」「調子」「気配」「事情」といった語が考えられるが、E-DIC に表れた「体験名詞」の数は、次の通りである。

E-DIC における「体験名詞」の数

顔	気持ち	調子	姿	気分	様子	事情	雰囲気	表情	気配	口調	面	総計
813	489	278	243	236	128	89	88	61	21	14	4	2464
33%	20%	11%	10%	10%	5%	4%	4%	2%	1%	1%	0.2%	

この数字は、あくまで、用例数であり、見出し語と専門用語の例文は除いてある。(なお、「顔」については、「顔見知り」や「顔色」といった熟



語表現も含まれている。) もちろん、E-DIC の資料はきわめて限られたものであるとは言え、この中で、視覚として捉えられる「顔」「姿」「表情」「面」の用例が、5 割近くを占めているということは、本文での (5) の表と共に、知覚体験表現の中でも、〈顔〉に関する視覚表現が日本語において、大きな割合を占めていることについての一つの証左にはなると思われる。なお、(5) の表では、「表情」が 11% 占めているのに、この E-DIC の表では、2 % しか占めていないのは、小説と口語表現の違いが出たものと思われる。

- 5) ちなみに、次は、日本語の「顔」に lip が対応する場合と考えられる。

(i) ベラスコはその顔に苦笑がゆっくりと浮かぶのを見た。

(『侍』: 240)

Velasco saw a thin smile spread slowly across his lips.

(*The Samurai* : 159)

また、次は、eyes が「顔」に対応していると思われる場合である。

(ii) She raised her eyes and looked at Miles directly.

(*The Money Changers* : 369)

彼女は、顔をあげて、マイルズの顔をまっすぐみつめた。

(『マネーチェンジャーズ (下)』: 182)

(iii) The other two slowly raised their eyes. (*Hotel* : 124)

夫妻はゆっくり顔を見合せた。 (『ホテル (上)』: 185)

- 6) 「笑顔」を E-DIC で検索してみると、23 の用例がある。その対応英語表現は、smile の動詞用法が 10 例、名詞用法は 12 例で、注目すべきは、face が用いられた対応英語表現は 1 例もないということである。「笑顔」という表現は、顔全体の印象的表現であり、このことから、日本語話者は、あくまで、顔全体の印象を捉える傾向があるのに対し、英語話者は、顔全体の印象を、把握の対象としては捉えていないことがわかる。ちなみに「笑み」については、対応英語表現は 13 例あり、対応英語表現は、smile の動詞用法が 2 例、名詞用法が 8 例である。「微笑」については 3 例あり、対応名詞表現は、名詞 2 例、動詞 1 例となっている。

これらのことは、英語では、「笑顔」「笑み」「微笑」のそれぞれのニュアンスを区別し得ないということを意味しよう。

もっとも、「○○顔」の対応英語表現で、face は全く用いられないのかというそうではない。「思案顔」の例は E-DIC では見つからなかったが、「したり顔」は 2 つの用例があり、a smug look、a self-satisfied air が用いられている。また、「真顔」については 8 例あり、対応英語表現として、a straight face が 6 例、a sober face が 2 例あった。また、「得意顔」と「心配顔」については、それぞれ 1 例ずつあり、対応表現は、a smug look on his face と a worried look on his face となっている。とは言え、日本語での「○○顔」の表現は生産性が高く、「顔」の「体験表現」として定着していると言うことはできると思われる。このことは、後で述べる「面」についても当てはまることである。

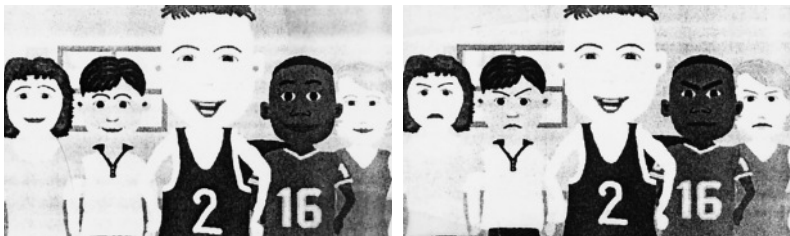
- 7) もちろん、「しかめ面」には a frown や、「仏頂面」には、a sullen (sour, long) face という、一般的な対応表現もあるにはある。しかし、「○○面」は、「○○顔」と同様に、生産性の高い表現である。
- 8) 牧野 (1978: 18, 229) では、キリスト教傘下の西洋社会では、「未練は負の概念」であることが述べられているが、ここで、問題にしている「後ろ姿」には、「未練」と少なからず、共通する面があるようにも思われる。
- 9) 例えば、*Curious George Takes a Job* (『ひとまねこざる』) という作品で、all over the walls というまとまりのある句を all over と the walls の 2 つに分断して載せているが (p.26-27)、日本語訳ではそのようにはなっていない。また、*Corduroy* (『くまのコールテンくん』) という作品では、his shelf が、his と shelf の 2 つに分断されているが、日本語訳 (p.8-9) ではそのようなことはあり得ない。
- 10) 牧野 (1978: 63) には、「例えば、アメリカのゲーム番組では司会者が正解者、優勝者にじかにむき出しで現金をどんどん渡す。受け取る方は受け取る方で、大喜びしながら現金をポケットにねじり込む。デパートなどで日本のデパートのように、きれいな包装紙をただで使ってくれると

ころなどありはしないのである。」との記述がある。

- 11) このことと関係がある文化心理学の文献として増田貴彦 (2010) 『ボスだけを見る欧米人 みんなの顔まで見る日本人』が挙げておかねばならない。この本は、東アジア文化圏で特徴的な思考様式である「包括的思考様式」と欧米文化圏で特徴的な思考様式である「分析的思考様式」について論じたものであるが、タイトルに「顔」があることからしても、本稿の内容とかなりの関連性があるものである。

この本では、「包括的思考様式」と「分析的思考様式」の違いを示す様々な例が紹介されているが、この本のタイトルと最も直接的に関わっていると思われる事例は、ある人の笑顔の度合いを判断する際に、周りの空気に影響されるのか、されないのかを調査した以下の心理学実験である (増田 2010 : 85-88)。

左側の図は、中心の人物は笑顔を見せており、残りの人物も同じように笑顔を見せている。つまり、表情が中心と周辺で一致している場合である。一方右側の図は、中心の人物は笑顔を見せているのだが、周辺の人物は怒りの表情を見せている。つまり、表情が中心と周辺で一致していない場合である。



その結果は、おそらくは予想されたような仕方で、日本人とアメリカ人に差がでた。実験に参加した日本人は、中心の人物の感情を判断するにあたり、背景の人々の表情に影響されてしまった。つまり、中心の人物が笑顔で、まわりの人たちも同様に笑顔であった場合に比べると、中心の笑顔が同じでも、まわりの人たちが怒りの表情を見せている場合には、中心の人物が喜んでいる程度を低く見積もってしまうという結果が

見られた。これに対して、アメリカ人の場合は、背景の人が怒っているが、笑っているが、周辺人物の表情からは、何ら影響を受けなかったというのである。

この実験の意味するところは、日本人は場面全体を「包括的」に捉えたのに対し、アメリカ人は「分析的」に捉えたということである。「包括的」とは、現場の雰囲気全体を把握したということでもあり、これは、本稿での「体験的」に重なる。つまり、増田で述べられている心理学実験の結果は、本稿での、日本語の「場面内視点」による「体験性」と、英語の「場面外視点」による「分析性」の捉え方を、間接的にはあるが、支持するものになると思われる。

「包括的思考様式」と「分析的思考様式」は、あくまで、心理学の概念であるが、認知言語学でこれと関連あると思われる概念に、山梨(2000)の「統合的スキーマ」と「離散的スキーマ」がある。我々が、外部世界を理解する場合、ある対象を、一つの統合的な存在として把握する場合が「統合的スキーマ」であり、その構成メンバーからなる複数の存在として把握する場合が「離散的スキーマ」である。



「統合的スキーマ」での把握であれば、限られた視界の中の全体の把握が可能となることから、周囲の雰囲気に敏感となり、「みんなの顔までみる日本人」ということになる。一方、「離散的スキーマ」での把握であれば、あくまで、全体を構成する、個々のメンバーに焦点がいくことになり、「ボスだけを見る欧米人」ということにもなる。 「統合的スキーマ」は「場面内視点」から生じるものであり、「離散的スキーマ」は「場面外視点」から生じるものと思われるが、「場面内視点／場面外視点」、「包括的思考様式／分析的思考様式」、「統合的スキーマ／離散的

スキーマ」のそれぞれの概念の関連性については今後の更なる検討が必要であろう。

濱田 (2011b) は、日本語の類別詞について論じたものであるが、日本語で複数を表示する形態素が発達しなかった理由として、日本語の「統合的スキーマ」での把握をあげている。

また藤田 (2009 : 29) は、『なぜ英語のネイティブは、見知らぬ人はいさつをするのか?』という問いに対して、「互いに危険な人物でないことを知らせあう」ためとしている。しかし、たとえそうであるにしても、この日本人と欧米人の違いにも「場面内視点」と「場面外視点」の違いが、関わっていると考えすることは可能であるように思われる。つまり、英語話者が「場面外視点」での捉え方をすれば、自分以外の人は、顔見知りであろうとなかろうと、同様に、同じような扱いをすることになると思われる。一方、日本語話者が、「場面内視点」での捉え方をするとすれば、いわゆるウチに属する「場面内」に属する人とそれ以外のソトの人間とは、接し方にも違いがでてくることになろう。

また、小笠原の『なんとなく、日本人』(2006 : 92) は、日本人の考え方の特徴として「決められた範囲の中で考える」ことを挙げているが、この「決められた範囲」とは、「場面内視点」で括られる境界ということになるだろうか。また、「なんとなく、日本人」でいられるのは、この「場面内視点」の最大境界にいる場合と言えるかもしれない。もっともさらに、なぜ、日本語は「場面内視点」であり、英語は「場面外視点」であるのかという問いに対しては、おそらくは、鈴木という「森林」と「砂漠」の違いにまでさかのぼることになると思われる。

ちなみに、「包括的な世界観」「分析的な世界観」の語は、『木を見る西洋人 森を見る東洋人』(2004) (*The Geography of Thought* (2003) R. E. Nisbett) で用いられている。(なお、この本には、共同研究者としての増田の名が数回述べられている。)

- 12) 日本語のプロセス志向、英語の結果志向については、影山 (2002) が詳しい。

- 13) 『週刊文春』(平成 23 年 5 月 19 日号) 鷲田康「野球の言葉学」(p.123)。  
この記事は、2011 年 5 月 5 日の阪神戦で 2000 本安打を達成した巨人の小笠原選手について、中日の落合監督が、「たかが二千本打っただけだろ」とコメントしたことを取り上げたものである。
- 14) 牧野 (1978 : 232) は、「全く新しい理論が日本から出て来ないのは日本人の能力の問題ではなく、むしろ古い理論——それも大概是借り物の理論——に未練がましくしがみつく文化的傾向によるのではなからうか」と述べている。  
また、日本においては、学問風土も周囲に影響されやすいことについては、尾野 (2008 : 92) の注の (21) も参照されたい。  
荒木 (1994 : 99) にも、第二次世界大戦における日本軍について、「日本軍は四年間も戦闘を経験していながら、その戦術は始めから終わりまで少しも変化がなかった。負けて負けて負け通しても、やはり負けた戦法でしかやってこないということであった。」との記述がある。
- 15) Pinnington, A. J. (1986) *Inside Out* (『裏返し——英語教育と日本文化』三修社) は、大学の英文講読用テキストとして書かれたものであるが、内容は興味深い日英比較文化論ともいえるものである。  
まず、Pinnington 氏は、スポーツにおける日英の大きな違いとして、“A deeper difference is perhaps that we put much more emphasis upon natural talent and much less emphasis upon learning than in Japan. (p.20)” と述べ、英国では才能が重視されるのに対し、日本では、努力のほうが重要視されるとしている。  
また、日本のテレビドラマでは、学園ドラマであれ、刑事ドラマであれ、主人公がやたらと走る等の活動“display of physical effort (p.42)” (肉体的な努力の跡を明らかにすること) が必ずあると指摘している。さらに、日本では、サラリーマンが遅くまで会社に残って仕事をすることも含め、これらのことを、“Visible Sincerity”「目に見えるまじめさ」と特徴づけている。これは、日本文化についての、牧野 (1996) のいう視覚型文化や、本稿で言うところのプロセス志向性と重なるところがあ

ると思われる。また、「共感」については、尾野 (2008a : 80-81) も参照されたい。

- 16) ザ・ブロード・サイド・フォーの『若者たち』(1966)の歌詞にある「君の行く道ははてしなく遠い」の「はてしなく続く道」のイメージは、きわめて、日本的なものであると言える。なぜなら、「場面内視点」は、ある意味で、金谷 (2010 : 175) のいう「地上の視点」であり、そうであれば、「道」は、「はてしなく続く」ことになるからである。もっとも、この点については、アメリカ民謡にも、『線路は続くよどこまでも』の「どこまでも続く線路」をイメージした歌があるのでないかとの指摘を受けそうであるが、この原曲は、“I’ve Been Working on the Railroad”で、最初の日本語題名は『線路の仕事』であった。まさに、歌詞の内容もタイトルも、「場面内視点」の日本語的なものに変更されたのである。美空ひばりの『川の流れのように』(1989)も、過ぎゆく「今」の体験を歌った日本的な感性の歌と言えるかもしれない。

- 17) このような現象は、映画だけには限らない。小説においても、アメリカの推理作家トマス・H・クック (Thomas H. Cook) の、『緋色の記憶』(1998) (*The Chatham School Affair*) が評判になると、全く別個の物語であるにもかかわらず、『死の記憶』(1999) (*Mortal Memory*)、『夏草の記憶』(1999) (*Breakheart Hill*)、『夜の記憶』(2000) (*Instruments of Night*) といった『記憶』シリーズとして出版されるという現象がある。このことも、シリーズもののタイトルが、物語世界を体験することを可能にするためと思われる。

もちろん、アメリカ映画でも、『ロッキー』シリーズのように、原題に番号のついたシリーズものの映画がある。『ロッキー 2』(Rocky II、1978年)、『ロッキー 3』(Rocky III、1982年)、『ロッキー 4/炎の友情』(Rocky IV、1985年)、『ロッキー 5/最後のドラマ』(Rocky V、1990年)、『ロッキー・ザ・ファイナル』(Rocky Balboa、2006年)。しかし、ここで、興味深いことは、邦題には、「炎の友情」や「最後のドラマ」といった、体験的な副題が付け加えられているものもあるという

ことである。

- 18) 『侍』(1986:247) には、日本人の本質的に、人間を越えた絶対的なものに対する感覚のなさについて、神父が次のように語る場面がある。「彼らの感性はいつも自然的な次元にとどまっていて、決してそれ以上、飛躍しないのです。自然的な次元のなかでその感性は驚くほど微妙で精緻です。が、それを超える別の次元では捉えることのできぬ感性です。だから日本人は、人間とは次元を異にした我々の神を考えることはできません。」この発言は、きわめて、日本人の感性を言い当てたものと思われるが、「自然的な次元」と「場面内視点」、「それを越える別の次元」と「場面外視点」を関連づけることは、あながち、無謀とばかりは言えないようにも思われる。

#### 参考文献

- 秋元美晴. 2006. 「日本語と英語の身体語彙を含む慣用句」『ことばと文化をめぐって 外から見た日本語発見記』ひつじ書房.
- 荒木博之. 1994. 『日本語が見えると英語も見える』中公新書.
- 池上嘉彦. 2002. 『自然と文化の記号論』放送大学教育振興会.
- 池上嘉彦. 2004. 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(1)」『認知言語学論考 No.3 2003』1-49, ひつじ書房.
- 池上嘉彦. 2005. 「言語における〈主観性〉と〈主観性〉の言語的指標(2)」『認知言語学論考 No.4 2004』1-60, ひつじ書房.
- 大津栄一郎. 1993. 『英語の感覚(上)』岩波新書.
- 小笠原泰. 2006. 『なんとなく、日本人』PHP 新書.
- 尾野治彦. 2004. 「日英語の映画のタイトルにおける表現の違いをめぐって —「感覚のスキーマ」と「行為のスキーマ」の観点から—」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 36 号, 63-110.
- 尾野治彦. 2008a. 「絵本における日英語の推移表現の比較 —〈臨場的スタンス〉と〈外置的スタンス〉の観点から—」『北海道武蔵女子短期大学紀要』第 40 号, 37-99.



- 尾野治彦. 2008b. 「〈臨場的スタンス〉がとる推移的表現について — 絵本における英訳との対比を通して —」『日本語用論学会・第10回大会発表論文集』第3号 (2007), 343-346.
- 尾野治彦. 2011. 「「S1 と、S2」と「やがて」における「体験性」をめぐる — 対応する英語表現と比較して —」(『英文学研究 支部統合号』第3巻, 29-46.
- 影山太郎. 2002. 『ケジメのない日本語』岩波書店.
- 金谷武洋. 2004. 『英語にも主語はなかった』講談社選書メチエ.
- 金谷武洋. 2010. 『日本語は減びない』ちくま新書.
- 国広哲弥. 1997. 『理想の国語辞典』大修館書店.
- 熊倉千之. 1990. 『日本人の表現力と個性』中公新書.
- 鈴木秀夫. 1978. 『森林の思考・砂漠の思考』NHK ブックス.
- 中村芳久. 2004. 「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」『認知文法論Ⅱ (シリーズ認知言語学入門第5巻)』3-51, 大修館書店.
- 中村芳久. 2009. 「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』353-393, 開拓社.
- 鍋島弘治朗. 2011. 『日本語のメタファー』くろしお出版.
- 西村義樹. 2000. 「対照研究への認知言語学的アプローチ」『認知言語学の発展』145-166, ひつじ書房.
- R. E. ニスベット. 2004. 『木を見る西洋人 森を見る東洋人』村本由紀子訳, ダイアモンド社.
- 濱田英人. 2011a. 「言語と認知 — 日英語話者の出来事認識の違いと言語表現 —」『函館英文学』第50号, 65-100.
- 濱田英人. 2011b. 「日本語話者のモノの認識と類別詞」『札幌大学外国語学部紀要』第75号, 51-77.
- 藤田英時. 2009. 『なぜ英語のネイティブは、見知らぬ人にあいさつをするのか?』宝島社.
- 牧野成一. 1978. 『ことばと空間』東海大学出版会.
- 牧野成一. 1996. 『ウチとソトの言語文化学 — 文法を文化で切る —』アルク.

- 増田貴彦. 2010. 『ボスだけを見る欧米人 みんなの顔まで見る日本人』講談社+α新書.
- 町田 章. 2011. 「日本語ラレル構文の形式と意味」『意味と形式のはざま』163-177, 英宝社.
- メイナード, 泉子・K. 2000. 『情意の言語学 —「場交渉論」と日本語表現のパトス—』くろしお出版.
- 森田良行. 1986. 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 柳父 章. 1979. 『比較日本語論』バベル・プレス.

## 資料

### 日本語原文のもの

- 乃南アサ. 1996. 『凍える牙』新潮文庫.
- The Hunter*. Juliet Winters Carpenter(tr.). 2006. Kodansha International.
- 内田康夫. 1985. 『戸隠伝説殺人事件』角川文庫.
- The Togakushi Legend Murders*. David J. Selis(tr.). 1994. Tuttle Publishing.
- 遠藤周作. 1986. 『侍』新潮文庫.
- The Samurai*. Van C. Gessel(tr.). 1997. New Directions Classic.
- 中川正文 (作)・山脇百合子 (絵). 1974. 『ねずみのおいしゃさま』福音館書店.
- Dr. Mouse's Mission*. Mia Lynn Perry(tr.). 2007. アールアイシー出版.
- 藤沢周平. 1985. 「驟り雨」『驟り雨』新潮文庫.
- "A Passing Shower" The Bamboo Sword*. Gavin Frew(tr.) 1981. Kodansha International.
- 松岡享子 (作)・林 明子 (絵). 1982. 『おふろだいすき』福音館書店.
- I Love to Take a Bath*. Mia Lynn Perry(tr.). 2004. アールアイシー出版.

英語原文のもの

Brown, D. 2003. *The Da Vinci Code*. Doubleday.

『ダ・ヴィンチ・コード (上) (中) (下)』越前敏弥 (訳). 2006. 角川文庫.

Buscaglia, L. 1982. *The Fall of Freddie the Leaf*. SLACK.

『葉っぱのフレディ』みらいなな (訳). 1998. 童話屋.

Freeman, D. 1976. *Corduroy*. Puffin Books.

『くまのコールテンくん』まつおかきょうこ (訳). 1975. 偕成社.

Hailey, A. 1966. *Hotel*. Bantam Books.

『ホテル (上) (下)』高橋 豊 (訳). 1974. 新潮文庫.

Hailey, A. 1976. *The Money Changers*. Bantam Books.

『マネーチェンジャーズ (上) (下)』永井 淳 (訳). 1978. 新潮文庫.

James, P. D. 1989. *Devices and Desires*, Faber and Faber.

『策謀と欲望 (上) (下)』青木久恵 (訳). 1999. ハヤカワ文庫.

Rey, H. A. 1947. *Curious George Takes a Job*. Houghton Mifflin Company.

『ひとまねこざる』光吉夏弥 (訳). 1983. 岩波書店.

Sendak, M. 1963. *Where the Wild Things Are*. Harper Collins.

『かいじゅうたちのいるところ』じんぐうてるお (訳). 1975. 富山房.

Zolotow, C. (text) & Lobel, A. (illustration). 1963. *The Quarreling Book*.

『なかなおり』みらいなな (訳). 2008. 童話屋.